

考えるヒント

小林秀雄

107—2

---

考えるヒント2

定価はカバーに  
表示してあります

1975年6月25日 第1刷

1984年8月5日 第12刷

著 者 小林秀雄

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

---

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文 春 文 庫

考 え る ヒ ン ト 2

小 林 秀 雄

文 藝 春 秋



考えるヒント 2

目次

考えるヒント 2

忠臣蔵 I ..... 10

忠臣蔵 II ..... 21

学問 ..... 34

徂徠 ..... 46

弁名 ..... 56

考えるという事 ..... 71

ヒューマニズム ..... 81

還暦 ..... 94

天という言葉……………106

哲 学……………118

天命を知るとは……………130

歴 史……………144

常識について……………155

解説 江藤 淳……………199



# 考えるヒント 2



# 考えるヒント 2

# 忠臣蔵 I

文士劇で「忠臣蔵」をやった時、正宗白鳥さんが、こんな連中のやるのを、ともかく見ていられるのは不思議だな、忠臣蔵という芝居は不思議な芝居だな、と言った。赤穂浪士等の討入事件に取材した芝居が、江戸で興行されたのは（これは幕府から差止めになったが）、事件後、一週間もたたぬ間であつた。以後、作者役者の不断の改良がつづけられ、歌舞伎最大の出し物に生長し、今も、正宗さんの言う不思議な芝居として演じられている。これは、討入事件そのものに、余程興味ある性質があつたが為だと思われる。

私は、戦争中、或る学校で、「忠臣蔵」の史実について、講義というほどの事ではないが、引き続き話した事があるので、事件に関し少しばかり知識を持ち、興味を抱いているのだが、近頃の学校の歴史でも、又、最近広く読まれた日本史などを見ても、この事件は、歴史家によって全く軽んじられているように見える。どうも氣に食わぬ想いがしている。これも亦不思議だ。文化を重んずるといふ建前から、例えば、元禄時代の歴史では、光琳宗達を語らねばならぬ、とする。それはよいが、討入より光琳宗達を重んずるといふ事になれば、これは筋が通るまい。なるほど

光琳宗達の出現は、重要な文化的事件であり、その影響するところは、人々の思想の上にあった、これはわかり切った事だ。それなら、討入事件も亦一種の精神的事件であり、その人々の思想に与えた甚大な影響力は、光琳宗達などの比ではない、という事が、何故わかり切った話ではないのか。

事件は、極くつまらぬ事から起った二人の武士の喧嘩に始まり、決着のつかなかったところを、人数を殖やした大喧嘩で始末をつけたというだけの事だ。喧嘩という言葉は、大石内蔵助の使った言葉で、たかが喧嘩に過ぎぬ、と彼は「浅野内匠頭家来口上」で明言している。喧嘩が起ったくらいで、社会に変動などありようがない。為に、誰の暮し向きも変りはしなかったのである。大事なのは、一週間もしないうちに、事を扱った芝居が現れた、当時の知識階級の代表者達も、一斉に、事件を論評した事だ。誰も彼も、義挙を肯定し賛美したと思うのは間違いで、知行欲しさのプロパガンダに過ぎぬと断ずる現代風の議論も、いくつもあった。事件の性質の分析は、當時も既にかなり厄介なものだったのである。たかが喧嘩に過ぎぬ、と内蔵助は言ったが、但し自分としては黙し難い考えの開陳があったと断っている。しかし、歴史家が、たかが喧嘩に過ぎなかったと言いきるなら、美術家が、光琳の「かきつばた」は、たかが屏風に過ぎぬというに等しいだろう。事件の力は、当初から偏ひとへにその意味にあった。意味がなければ、事件は無かったのである。

そこで、日本史の再検討という事で書かれる、現代の日本史が、討入事件を軽視している理由

を推察すれば、こういう事になるだろう。討入の精神上の影響力の甚大は認めるが、これは、現代では、もはや殆ど価値を認める事の出来ぬものになったという考えに基く。これに引きかえ、光琳の「かきつばた」の影響力は、現代の精神にも、未だ訴える力を持っている、と。では大石良雄の封建的思想と尾形光琳の封建的美とは、それほど風の変ったものか。「かきつばた」の現した美が、今日も尚生き長らえているのは、その美は、封建的という言葉では言い尽せぬものを持っていたからではないか。では、内蔵助の思想が古びたのはまさにそれが封建的思想で言い尽せるものであったからか。芸術と思想とは、それほど異ったものなのか。

社会学の強い影響を受けた現代の歴史家が提供する「封建的なもの」という図式は、実に大きな力を持っている。これを学問上の概念として、慎重に使い、その価値について、いらざる事を口走らぬという事も、学者には、なかなか難しい次第になっている。それほどであるから、一般には、封建的な事とは野蛮な事の義になっているのは止むを得ない。例えば、討入で、徒党は皆切腹した。何んという野蛮な行為だ、期せずしてそういう言葉を発する。だが、切腹という封建的処刑の形式は、今日の絞首刑の形式より、それほど野蛮なわけはなかった。

「忠臣蔵」の判官は、由良之助を待ちかねて、九寸五分を渡すのだが、無論、大石は国家老で赤穂にいたから、何にも知らなかったのだし、「門外」で、チョボで、刀を嘗めようにも、刀に血が付いていた筈もなかった。内匠頭は、首を打たれたので、腹を切ったのではない。元禄の頃にもなれば切腹の作法は、行きとどいて、やかましいものだったから、介錯人への合図は、九寸五

分でも、扇子でもよかったが、首が飛ぶ前に、勝手に腹など切るわけにはいかなかった。だから、介錯人には、慎重に達人が選ばれたのである。復讐を行った一党が、江戸で、四家に預けられ、処刑された時、毛利家に預けられた切腹人の一人、間新六<sup>はざま</sup>が、青年客氣にはやり、勝手に腹を七寸も切つて了つた。これには太刀取りもあわてたが、検使もあきれたと言う。だが、そんな事は、大した事ではない。

内匠頭と上野介との営中の喧嘩は、朝の十時頃の事であつた。上野介は、「お構いなし」という事で、内匠頭の方は、その場から、田村家に護送され、其処で切腹したのは、その日の暮方六時頃であつた。この囚人には、その間、外部から隔てられ、行動の自由も発言の自由もなかったのである。一時の逆上による生涯の変転は、突如至つて、忽ち終つた。この間の内匠頭の言動につき、動かせぬ確証に基いて、言えるようなものは何一つない。

I  
蔵 内匠頭は、切腹の前、外部の者には、家来片岡源五右衛門一人に会っている。それも、検使の黙認による庭先きの対面で、言葉を交わす事が出来たとも思われない。彼の検使への発言は、三つしか伝えられていない。一つは、「かねて知らせて置く可き事と思つていたが、暇がなかった。今日の事は、已むを得ざるに出たる儀であつた」と家中に伝言を頼んだ事。上野介の負傷の経過を聞いた事。検使は、その心事を不便に思い、重態で一命のほど覚束ぬ、と答えた。もう一つは、介錯には、自分差料の刀を使用されたい旨許可を求めた。刀がとどく間に、料紙硯を乞い、辞世をしたためた。

こういう言い伝えが、みな本当だったとしても、又、この他に、もっと本当らしい言い伝えがいくつあったとしても、彼の心事を推測する足しになるだろうか。竹田出雲が、塩冶判官えんやという名を思い付いた如く、赤穂藩は、塩田で豊かで、彼は月並みな藩主として、うかうかと暮して来た。十七歳の少年時代、やはり勅使饗応掛りを勤め、首尾よく行ったのに、三十五歳になり、すこしばかり知恵がついたところで、又勤めてみたら、飛んだ失敗を仕出かした。彼は、上野介に切付けた時、思い知ったかと大声を發したと言われるが、それが確かでないとしても、思い知ったのは当人であった事に、間違いあるまい。ところで、彼は、何を思い知ったのか。

ここに、歴史家が、素通りしてう歴史の穴ともいうべきものがある。穴は暗い。それは、あんまり個人的な主観的な事実で、詰っている。そのようなものに、かかずらっていると、歴史の展望を誤るおそれがある。それは一応尤もな事だが、もう少し正直に考えてみよう。穴は過去の歴史の上に開いているばかりではない。私達の現在の社会生活の何処にでも口を開けている。窮境に立った、極めて難解な人の心事を、私達の常識は、そっとして置こうと言うだろう。そっとして置くとは、素通りする事でも、無視する事でもない。そんな事は出来ない。出来たら人生が人生ではなくなるだろう。経験者の常識が、そっとして置こうと言う時、それは、時と場合とによつては、今度は自分の番となり、世間からそつとして置かれる身になり兼ねない。そういうはつきりした意識を指す。常識は、一般に、人の心事について遠慮勝ちなものだ。人の心の深みは、あんまり覗き込まない事になっている。この常識が、期せずして体得している一種の礼儀と見える

ものは、実際に、一種の礼儀に過ぎないもの、世渡り上、教えこまれた単なる手段であろうか。

一種の礼儀だとしても、この礼儀が人間社会に下した根はいかにも深いものと思われる。今日は、心理学が非常に発達し、その自負するところに従えば、人心の無意識の暗い世界もつぎつぎに明るみに致される様子であるが、だが、そういう探究が、人心に関する私達の根本的な生活態度を変える筈はない。変えるような力は、心理学の仮説に、あろうとも思えない。私達は、人の心はわからぬもの、と永遠に繰返すであろう。何故か。

未経験者は措くとして、人の心はわからぬものという経験者の感慨は、努力次第で、いずれわかる時も来るといふような、楽天的な、曖昧な意を含んではない。これには、はっきりした別の含意があつて、それがこの言葉に、何か知らぬ目方を感じさせているのである。それは、人の心が、お互に自他共に全く見透しのような、そんな化物染みた世間に、誰が住めるか、と言つてゐるのだ。常識は、生活経験によつて、確実に知つてゐる、人の心は、その最も肝腎なところで暗いのだ、と。これを、そつとして置くのは、怠惰でも、礼儀でもない。人の意識の構造には、何か窮極的な暗さがあり、それは、生きた社会を成立させてゐる、なくてかなわぬ条件を成してゐる、と。私は、わかり切つた事実を言つてゐる。あまりわかり切つた事実で、これを承知してゐる事が、生きるといふその事になつてゐる。従つて、この事実への反省は稀れにしか行われな

い、と言つてゐるのだ。

尋常な暮らしのうちに尋常に生きてゐる私達の心は、人間についての、あまり抽象的な説明に出